

# レシール・B・モハレス著『国家の頭脳たち』を読む ——フィリピン革命のハイブリッド的特徴を求めて

永野 善子

## はじめに

本稿は、フィリピン文化史研究の分野で多くの著書を執筆してきたレシール・B・モハレスの大作『国家の頭脳たち：ペドロ パテルノ、T・H・パルド・デ・タベラ、イサベロ・デ・ロス・レイエスと近代的知の生成』（Mojares, 2006）を読み、フィリピン革命史研究における同書の意義を考察することを目的としている。

筆者は、フィリピン歴史研究においてフィリピン革命がどのように捉えられてきたのかを追跡するために、これまでいくつかの小論をまとめてきた（永野 2005；永野 2013；永野 2018；永野 2020；永野 2021；永野 2022）。従来から多くの論者が議論してきたように、第二次世界大戦後の独立以降に公刊されたフィリピン革命史研究のなかで、最も大きな影響を与えてきた著作は、テロドロ・A・アゴンシリョ著『大衆の反乱：ボニファシオとカティプーナンの物語』（Agoncillo 1956/1996）とレイナルド・C・イレート著『キリスト受難詩と革命：1840～1910年のフィリピン民衆運動』（Ileto 1979/1989、邦訳、イレート 2005）である。前者のアゴンシリョの著書は、1960年代以降に「未完の革命」としてフィリピン革命を位置づける方向で大筋の議論が進められる上で決定的著作となった。この「未完の革命」論のなかでは、革命政府を率いたものの、アメリカの軍事的介入に屈服したエリート層は、「革命の裏切り者」であり、「革命を持続する民衆」の「敵」として理解され、反植民地抵抗運動としての民衆史に軸足を置いた革命史研究がフィリピン人研究者たちによって展開された。こうした民衆史の手法は、イレートの研究によって、都市労働者層や農民、さらにはコロルムと呼ばれる土着宗教集団など、多くの場合、「大衆」として語られる一般住民がフィリピン革命にどのように関与していたのか、その国民性の心象を描く文化史研究へと深化発展していった。

さらに1990年代になると、グローバル化のなかでフィリピン社会が変化する過程で、過去半世紀余り続いた「未完の革命」論に代わる新たなパラダイムが模索され、「未完の革命」論ではともすれば軽視されてきたエリート層の特徴とその役割に再度関心が向けられた<sup>1)</sup>。近年におけるフィリピン革命史研究のアプローチの変化は、大局的にみると、長らくフィリピン独立革命の主たる担い手として位置づけられてきた一般民衆像に再検討を加えながら、社会の中間層もしくはエリート層に焦点をあてつつ、フィリピン革命を政治的現象とだけでなく、その社会・文化的側面に関心を向けながら、多角的な観点から革命のダイナミズムへ接近しようとする試みとみることができよう。

本稿で取り上げる『国家の頭脳たち』は、こうした研究潮流のなかで、従来の「未完の革命」論ではむしろ否定的存在として位置づけられてきた3人の有産知識階層（イルストラード *ilustrado*）の来歴と著作群を丹寧に追跡し、彼らのフィリピン革命期における国民的学知の形成に対する役割に対して再評価を加えた労作である。以下、第1節でモハレスの略歴と語法を紹介し、第2節で『国家の頭脳たち』の構成の特徴を概観したうえで、第3～6節では各章ごとの内容を簡潔にまとめ、本書のフィリピン革命史研究としての意義を位置づけることにしたい。

# 1. モハレスの略歴と語法

レシール・B・モハレスは、文芸批評・文化研究・歴史学の多岐にわたって20数冊にも及ぶ著作を公刊してきたフィリピンの代表的文化人であり、その功績により2018年に「フィリピン共和国国家芸術家（文学）」の栄誉を与えられた。この間のモハレスの文筆家としての一貫した立ち位置は、「フィリピン国内にその基盤を置く研究者」（home scholar）（Mojares 2017: 154）であり、しかもフィリピンの中心地であるマニラ首都圏から離れて、地方都市セブからフィリピンの歴史や文化を見渡すというものであった。このため、モハレスは、従来、中心的議論から取り残されたフィリピンの歴史・社会・文化の周辺の諸要因を丹念に洗い出し、それらを積み上げながら、フィリピンの文芸批評・文化研究・歴史学における新しい枠組みを構築する作業を進めていった。

その略歴をみると、モハレスは、1943年9月4日にミンダナオ島北サンボアンガ州ボランコ町に生まれ、同州の高校を卒業したのち、東ネグロス州ドゥマゲッティ市のシリマン大学に進学した。さらに、セブ島セブ市のサンカルロス大学に移籍し、1964年に同校の学部（英語専攻）を卒業した。その後同大学で教鞭を執りながら大学院に進学し、1969年に修士号（文学）を取得した。そして1975年に同大学でセブアノ研究センターが開設されると同センターの初代所長を務め、1979年には国立フィリピン大学ディリマン校から博士号（文学）を取得した。その後、アメリカ、日本、シンガポールの諸大学で客員教授や客員研究員を歴任し、現在はサンカルロス大学名誉教授である。上記の経歴からモハレスが、文字通り「フィリピン国内で形成された知識人」（homegrown intellectual）であることがわかる（“Dr. Resil Mojares” 2011; Hau et al. 2019: 636; “Mojares, Resil B.” 2020）。

その主要な著作群をみると、フィリピン全体を展望する著作と同時に、地方都市セブをテーマにした著作を著しており、モハレスが地方から中心に接近することによって、とすればフィリピンの中心地マニラで活躍する研究者たちが見逃してしまうような周辺の諸要因を発見し、その諸要因を分析しつつ新しい全体像を生み出す手法を確立していったように思われる<sup>2)</sup>。たとえば、モハレスのフィリピン革命史研究の第一作は『アメリカ人たちに対する戦争：セブにおける抵抗と協力：1899～1906年』（Mojares 1999）であり、本小論で扱う『国家の頭脳たち』は、フィリピン革命の時期を扱った分野のモハレスの著作としては第二作にあたる。前者は、セブ地域におけるフィリピン・アメリカ戦争の展開を丹念に追跡した政治・社会史研究であるのに対して、後者は、フィリピン革命期に活躍した有産知識階層の来歴や著作を扱ったもので、分野としては文化史研究に区分されるものであり、二つの著作の目指す方向性は異なっている。しかし、地方社会セブを舞台としてフィリピン・アメリカ戦争についての著作をまとめたことが、文化研究の分野からフィリピン革命史に接近するための土台づくりとなったとみることもできよう。なお、モハレスの著作群にはいくつかの伝記<sup>3)</sup>もあり、『国家の頭脳たち』で3人の有産知識階層の歩みを時間軸に従って追跡する手法は、伝記を執筆する過程で獲得されたもののように思われる。

とすると、モハレスは『国家の頭脳たち』を執筆する準備をどのように進めていたのだろうか。ペドロ パテルノ、T・H・パルド・デ・タベラ、イサベロ・デ・ロス・レイエスの3人の有産知識階層を選び出し、フィリピン社会における近代的知の生成を議論する枠組みをどのようなプロセスで創造していったのだろうか。モハレスの著作群を点検すると、彼の文化史の研究の原点であり、博士論文をもとにまとめられた著書『フィリピンにおける小説の起源と勃興：1940年までのその包括的研究』（Mojares 1983）の第4章に「後期植民地期における語り」と題する章があり、1880年代におけるプロパガンダ（Propaganda 啓蒙改革）運動の初期段階においてイサベロ・デ・ロス・レイエスとペドロ・パテルノが活発な著述活動を展開したことに触れている（Ibid: 121-130）。さらに1990年代後半になると、モハレスの関心は、スペインとフィリピン国内で展開されたプロパガンダ運動がフィリピンにおける学知の形成とどのようなつながりをもっていたのかへと深化し（Mojares 2002: 270-296; Sabanpan-Yu 2015: 101-118）、『国家の頭脳たち』の執筆にいたるのである。

こうした思考過程と執筆活動の軌跡を跡づけるかのように、2006年に大著『国家の頭脳たち』を刊

行後、モハレスは2014年にアテネオ・デ・マニラ大学で「アンドレス・ボニファシオと階級問題」と題する講義をおこない、19世紀フィリピン近代史全体のなかにフィリピン革命を位置づけている。それによると、19世紀フィリピン史は、①1810～40年、②1840～80年、③1880～96年の三つの時期に区分でき、第1段階は、スペインとラテンアメリカにおける自由主義の高揚に影響を受けてマニラでスペイン系の住民やカトリック司祭たちの植民地支配体制に対する不満が高まった時期、第2段階は、植民地体制への不満が徐々にマニラ周辺諸州の中間層や一般住民にも浸透していった時期、そして第3期は、そうした中間層や一般住民の不満を背景として、1892年に秘密結社カティブーナが結成され、1896年のフィリピン革命勃発にいたった時期とする（Mojares 2017: 27-28）。

ここでモハレスは、従来注目されてこなかった事象として、1888年にマニラの住民300人がマニラ大司教と教区司祭の追放を求めてマニラの路上で抗議デモをおこない、同年にマルセロ・H・デル・ピラールがプロパガンダ委員会（Comite de Propaganda）を結成する契機となったことを取り上げている。同委員会はマニラの都市住民（弁護士、教員、事務員、ジャーナリストなど）を中心とする、フィリピン国内における最初の政治改革運動組織となった。さらにモハレスは、これまでプロパガンダ運動について議論される場合、ホセ・リサール、ペドロ・パテルノ、T・H・パルド・デ・タベラなどのヨーロッパでの活躍に焦点が当てられ、彼らの有産知識階層としてのエリートの役割についてのみ関心を向けられてきたことを批判する。なぜなら、そうした思考様式は、プロパガンダ運動とフィリピン革命とのつながりを単純化したり、否定することになったからである。モハレスはいう、「私たちはフィリピン国内で展開された運動にもっと注意深く考察する必要がある」と（Ibid.: 29-31）。

このような観点からプロパガンダ運動に向き合うモハレスの姿勢は、大著『国家の頭脳たち』においても十二分に発揮されている。同書では、ペドロ・パテルノ、T・H・パルド・デ・タベラ、イサベロ・デ・ロス・レイエスの3人の有産知識階層の来歴や著作群を丹念にあたりながら、プロパガンダ運動からフィリピン革命、そしてアメリカによる植民地支配期を生き抜いた彼らの知識人としての役割を再評価し、彼らの知的活動とフィリピン国内における国民的学知の形成との関わりを明らかにしているからである。次節では、『国家の頭脳たち』の内容を素描するにあたり、本書が一冊の研究書としてどのように構成されているのか、その構造を分析することにした。

## 2. 『国家の頭脳たち』の構造

『国家の頭脳たち』は総頁数565頁にも及ぶ大書であり、いうまでもなくモハレスのフィリピン文化研究史の集大成としての記念碑的作品である。本書は四つの章で構成されており、ひとつの章が70～100頁にも及び、各章ごとが三つの節からなっている。なお、各章には章としての番号は付されていない。本書の目次は以下のとおりである。

まえがき

ペドロ・パテルノ

ルソンの君主

文明を想像する

理論を転換利用する

T・H・パルド・デ・タベラ

かけ離れた人物

理性の先導者

国家をつくる

イサベロ・デ・ロス・レイエス

野生の修道士

国内の学知を展開する

- イサベロを生み出す
- フィリピンの啓蒙主義
- 絡み合う系譜
- エリート層の台頭
- 私たち自身について記述する
- 付録
- 索引

以上の構成により、本書が、「パテルノ」、「パルド・デ・タベラ」、「デ・ロス・レイエス」の3章を交差させて、いわゆるヘーゲルの弁証法の「正・反・合」の論法を使いながら、彼ら3人の来歴（生誕、家族、教育、活動の場）、その著作群の分析をおこない彼らを文化人として評価し、さらに最終章として「フィリピンの啓蒙」の章では、彼ら3人が活動の舞台とした19世紀フィリピンの社会・政治・経済状況の変化を踏まえて、フィリピンにおける国民的学知の形成の特徴と意義の全体像を提示するという野心的試みをおこなっていることがわかる。さらに、各章も三つの節から成り立ち、それぞれの章が「来歴」、「著作群」、「評価」という「正・反・合」の弁証法の論法によって構成されているという点も興味深いところである。以下では、「パテルノ」、「パルド・デ・タベラ」、「デ・ロス・レイエス」、そして「フィリピンの啓蒙」の順に、その内容を素描することにした。

### 3. 『国家の頭脳たち』を読む(1)：ペドロ・パテルノ

ペドロ・パテルノ(1857-1911)は、スペイン植民地期末期のプロパガンダ運動、対スペイン独立戦争からフィリピン・アメリカ戦争、そしてアメリカ植民地初期の激動の時代を生きぬいた文化人であり政治家でもある。しかし、そうした時代におけるパテルノの政治的スタンスはこれまで批判的に捉えられることが多く、彼が書き遺した多くの書物やエッセイなどについて長らく顧みられることはなかった(Zaide 1970: 383-393; Ocampo 2005; Reyes 2006)<sup>4)</sup>。しかし、モハレスは本書においてパテルノの来歴と著作群を丹念に追跡し、パテルノがフィリピン国民の学知の萌芽的形成に果たした役割を再評価する。

「ルソンの君主」と題された最初の節でまとめられているペドロ・パテルノの来歴によると、彼は、1857年2月27日、マニラのきわめて裕福な華人系メスティーソの家に生れた。ペドロ・パテルノの父親マキシモ・パテルノ(1830-1900)は、マニラ湾での船運送業や外国商社との取引、さらにはバタングス州での農地取得などによって財を成した。マキシモは3度結婚し、15人の子どもを設けたが、ペドロは2番目の妻の息子である。パテルノは1871年にイエズス会が経営するマニラのアテネオ学院で中等教育を修了し、わずか14歳のときにスペインに渡り、サラマンカ大学で哲学と神学を学び、その後マドリッド中央大学に移籍して、1880年に博士号(市民法)を取得した。しかし、この間に彼の父親マキシモは、1872年の軍港カビテの労働者暴動との関係を疑われ、同年からグアム島に追放され、10年後の1882年によくマニラに戻ることができた(Mojares 2006: 4-8)。

モハレスは、こうした家族をめぐる事件が若いペドロにどのような影響を与えたのかはわからないとする。ともかく、父親がマニラに戻ったあと、ペドロは一時帰国し、その時、ホセ・リサールにも会い、彼にスペイン留学を勧めたという。そしてその1年後、中国・日本・アメリカ・ヨーロッパ諸国を経由して再びスペインに戻り、以来10年ほど同地で文筆活動を続けた。こうしてパテルノは、ホセ・リサール、マルセロ・デル・ピラールやマリアノ・ボンセラ、1880年代にスペインでプロパガンダ運動を率いた有産知識階層より10年以上も早くからスペインに根を下ろしていた。しかし、パテルノはフィリピンの政治改革を主張する彼らの運動とは常に距離を置き、むしろスペイン政府高官との交流を重要視した(Ibid.: 8-16, 66-67)。

パテルノは1893年にマニラに戻り、翌年には、スペインでの文化活動が評価されて、1891年に新設

された「図書館兼博物館 Museo-Biblioteca」<sup>5)</sup>館長に任命された。そして1896年にマニラでの武装蜂起によりフィリピン革命が勃発したが、パテルノは武装蜂起に賛成の立場をとることはなく、むしろスペインとフィリピンとの間の調停役を演じた。その結果が、1897年12月にスペイン政府とフィリピン革命政府との間で結ばれた停戦協定のピアック・ナ・バト協定であった。さらに1898年4月に米西戦争が勃発すると、パテルノはフィリピンとスペインとの歴史的つながりからスペイン側に立ったものの、同年8月にアメリカ軍がマニラ開城に成功したため、パテルノはフィリピン革命政府側につくほか選択肢がなくなり、1899年9月にエミリオ・アギナルド将軍によってマロロス会議議長の任命を受けた。しかし、フィリピン革命軍は対アメリカ軍との戦闘で劣勢となったため、ルソン島山地に敗走し、1900年4月にはパテルノ自身もベンゲット州でアメリカ軍に捕らえられた (Ibid.: 16-31)。

さらに1901年3月には、アギナルド将軍がルソン島山地イサベラ州でアメリカ軍に逮捕され、その後フィリピン革命政府が崩壊した。そのときパテルノはまだ44歳だった。その後パテルノは新聞紙『祖国』(1902-03)を創刊し、フィリピンのアメリカ統治を支持する文筆活動を開始する。そして1906年には新党ユニオン・ナシオナルに加盟し、第1回フィリピン議会のラグナ州議員となるが、もはや当時のフィリピン政界で彼の存在が重要視されることはなかった。こうして、超富裕な華人系メステイソとして20年ほどスペインに在住し、スペイン文化を背負った「ルソンの君主」たるパテルノは、1911年3月11日に54歳の人生の幕を閉じた (Ibid.: 31-42)。

以上のようにモハレスはパテルノの来歴をまとめたあと、次節「文明を想像する」で、彼の著作群の全体像を俯瞰する作業をおこなう。本節をモハレスは次の言葉から始める。

今日、だれもペドロ・パテルノを読もうとはしない。ジョン・シューマッハーはパテルノの著作は学問としての価値がないとする。彼は19世紀後半のフィリピン人の間で高まった国民としてのアイデンティティへの指標としてパテルノの価値を認めるものの、パテルノの著作は過度に誇張され、空想的で、的外れであるとする。典型的な「国民史」家としてシューマッハーは、パテルノのフィリピン文明に対する「エキセントリックで独創的な著作物」は国民的理念を蝕むことになった、という。……

しかし、私たちはパテルノとその著作を受け入れるべきである。ホセ・リサール、グレゴリオ・サンシアンコそしてT・H・パルド・デ・タベラを同時代人として、彼はフィリピン学知の歴史の開始点に立っている。どのような欠陥があったとしても、彼の人文科学における著作はフィリピン研究の歴史のなかでその位置が認められるべきである。それは世界諸国のひとつの国民であるという私たちの意識のアーカイブの一部なのである (Ibid.: 43)。

モハレスはこのように語り、パテルノの著作群の分析をおこなう。その膨大な数の刊行物は本書の巻末にリストが掲載されており (Ibid.: 530-535)、モハレスはそのリストにしたがって1885年から1911年までのパテルノの著作活動を評価している。モハレスによれば、パテルノの著作は二つの衝動によって生み出されているという。その衝動とは、第1には、「自己成型」のルネサンス的欲望、つまり、博学な紳士であるという自己とそのイメージの形成であり、第2には、フィリピンが際立った文明の位置にあることを明確に示したいという願望である。そしてモハレスは、こうしたことを端的に表現した小説が『ニナイ *Ninay*』(1885年)であるとする (Ibid.: 43-44)。

『ニナイ』は、フィリピン人による最初の小説であり、またアジアにおいてスペイン語で書かれたはじめての小説とされている。1907年には英語に翻訳され、さらに1908年にはタガログ語版が刊行された<sup>6)</sup>。モハレスによれば、『ニナイ』は1880年代のマニラを舞台にした不幸な結果を招いた恋愛小説で、そこでパテルノが描いたフィリピンの風景は、一方で古風で風変りな地方社会であり、他方では、外部の文化的事象と接合された普遍的な騒動をもつものであった。スペインに在住し、スペイン人に向けてスペイン語で書くことによって、パテルノはフィリピンを客観化したのだという。ヨーロッパの意識的地図のなかにフィリピンを投入することは、当時スペインに在住していた外国人たちの間の国民意

識という言説において中心的課題をなしていた。この意味で『ニナイ』は、初期ナショナリズムの精神を体現した作品であった。パテルノは、フィリピン文化に対する人種主義的、植民地主義的侮辱に対して、同文化がスペインによる植民地化以前にほかの文化圏とは異質な要素をそのダイナミックな歴史のなかにもっていたことを示唆していた (Ibid.: 44-46)。

このようなパテルノの思考様式は、1887年に刊行された『タガログ古代文明』によってさらに発展した。『タガログ古代文明』は、パテルノが「ルソン諸島 *las islas Luzonicas*」と呼ぶフィリピンの歴史を「神話上」の時代と「史実上」の時代の二つに分割し、さらに後者の「史実上」の時代を、「先住民」、「タガログ文明」そして「カトリック文明」の三つの段階に分けている。そして、この3段階をとおして、ルソン諸島の宗教、道徳規範、法律、社会構造の相互関係の発展が普遍的かつ単線的進化過程をたどってきたこと、そして、あらゆる社会は高度な文明に達する以前には原始的な未開社会の時代を経過しており、ルソン諸島もスペイン、イギリス、ドイツと同様にそうした段階を経過したことが強調される。この結果、パテルノの議論は史実を検証するというより、むしろ自身の思い込みにもとづく半ば空想的な主張に傾斜することになる。たとえば、「タガログ文明」の時代の宗教の説明に際して、パテルノは、「タガリスモ *Tagalismo*」あるいは「バトハリスモ *Bathalismo*」という用語を自ら考案する。そして「タガリスモ」は世界のいかなる宗教よりも優れた宗教であると主張する (Ibid.: 46-48)。そして『タガログ古代文明』で展開されたパテルノのフィリピン文明史論は、基本的に1911年まで踏襲されていくことになる (Ibid.: 64-65)。

こうした分析をへて、モハレスは第3節「理論を継ぎ接ぐ」の冒頭で、「パテルノは尊大な道化師以上の人物である」と語る (Ibid.: 69)。そしてモハレスは、パテルノの形成した知的枠組みは、基本的にはヨーロッパで形成されたさまざまな学問を継ぎ接いだものだとする。その方法は、ヨーロッパにおける伝統的な理念だけでなく、19世紀に新たに生み出された言語や宗教、民俗についての理論を適宜流用しながら、フィリピンの社会・文化・宗教の特徴を解釈するというもので、それ故、多くの誇張や誤解も生まれた。パテルノは彼の同時代の有産知識階層よりもより多く、ヨーロッパの東洋学的風潮のなかで過ごした人物であった。彼は西洋の科学を礼賛し、キリスト教を信じ、そしてスペインにおいて完璧な市民とみなされることを深く望んでいた。この意味で、モハレスにとって、パテルノが生み出した学知とは、19世紀におけるフィリピン人ディアスポラの認識論的世界のなかで生み出されたものであった (Ibid.: 69-102)。

#### 4. 『国家の頭脳たち』を読む (2) : T・H・パルド・デ・タベラ

次章ではT・H・パルド・デ・タベラ (1857-1925) が取り上げられる。モハレスにとってパルド・デ・タベラは、正真正銘の有産知識階層である。スペイン人の血を引く超富裕階層の出身で、高度の学歴を身につけたパルド・デ・タベラは、スペイン期の植民地社会において傑出した地位を築いたものの、その名声を全うすることができなかった。このため、民族主義的な語りにおいて彼が成し遂げた功績は曖昧なものとなった。著名な歴史家テロドロ・アゴンシリョは、「パルド・デ・タベラは革命に対する裏切りの廉で撃ち殺されるべきだった」とまで語っている。しかし、モハレスによれば、パルドは20世紀への世紀転換期のフィリピンの近代科学の分野における最もすぐれた科学者だったが、知識人として正當に評価されることはなく、その傾向は現在も持続している、という (Ibid.: 121)<sup>7)</sup>。

本章の最初の節「かけ離れた人物」の冒頭でモハレスは以上のように述べ、パルド・デ・タベラの詳しい来歴を次のように綴っていく。パルドは、1857年4月13日、法律家でスペイン政庁官吏のフェリックス・パルド・デ・タベラとフリアナ・ゴリチョの間の3人の子どもの長男として、マニラのエスコルタで生まれた。1864年にパルドが7歳のとき、父親が若干35歳で他界したため、彼とそのきょうだいは伯父のホアキン・パルド・デ・タベラ (1829-84) に引き取られた。ホアキンは弁護士であり、サント・トマス大学で博士号を取得したのち、同大学で教鞭を執り、1860年代のマニラにおける改革運動の中心人物のひとりとなった。このため1872年にカビテ暴動が起きると、同暴動扇動の罪で彼の仲

間とともに逮捕され、その後4年間、グアムに追放・幽閉された。このころバルドはマニラのアテネオ学院で初等・中等教育を終え、1873年にはサンファン・デ・レトラン校で学士号を取得し、さらに医学を学ぶためにサント・トマス大学に進学した。1875年に伯父ホアキンはグアムへの追放から解かれたが、フィリピンへの帰国は許されずパリに向かった。このため当時18歳のバルドはきょうだいとともにパリに移住した (Ibid.: 122-126)。

バルドはパリで引き続き医学を学び、1880年に医師免許を獲得、翌年には医学博士号を取得した。その後、国立現代東洋言語学院に入学し、1885年にはマレー語学修了資格を得た。しかし、1884年に伯父ホアキンは亡くなり、彼の家族がフィリピンに帰国したため、27歳のバルドは彼の母親ときょうだいとともにパリで過ごすことになった。この間、彼はホセ・リサルなどプロパガンダ運動を担った有産知識階層と交流したが、改革運動とは一貫して距離を保ったという。バルドはその後、1887年にフィリピンに一時帰国し、翌年、コンセプション・セブラノと結婚し、1889年に再びパリに戻った。しかし1892年に、妹パスがその夫で著名なフィリピン画家ファン・ルナに殺害されるという悲惨な事件が起きた。この事件によってバルドは精神的な衝撃を受け、1894年にマニラに帰国する決意を固めた (Ibid.: 126-136)。

マニラでは1896年8月の武装蜂起によりフィリピン革命が勃発したが、バルドは革命運動に関わることはなかった。さらにスペイン軍とアメリカ軍との戦いが始まると、バルドは当初、双方との接触を保ったが、同年8月のアメリカ軍によるマニラ占拠後には、アギナルド率いる革命政府の側につき、同政府が招集したマロロス会議のセブ州代表となった。しかし1899年2月にフィリピン・アメリカ戦争が勃発すると、いち早くアメリカ軍側に立つことになる (Ibid.: 126-143)。

かくしてバルドは、アメリカ統治下初代総督タフトの右腕となり、フィリピンでアメリカが意図する政策の理解者となり、フェデラル党を結成する。そして1901年にはフェデラル党員のベニド・レガダやホセ・デ・ルスリアガとともにフィリピン政府の最高議決機関としての権限をもつフィリピン統治委員会委員に就任した。しかし、1903年にタフトが総督の座を退くと、後任のライト総督がフェデラル党を特別に支持することはなかったため、その勢いを失っていく。1907年の最初のフィリピン議会議員選挙ではナショナリスト党が第1党となり、フェデラル党は第3党の地位に甘んじた。こうして1909年2月になると、フィリピン統治委員会委員の職を辞し、バルドは政界から姿を消した。その後、彼は医学や教育の分野で活動したものの、妻と別居し孤独ななかで1925年3月26日にその生涯を終えるのである (Ibid.: 143-160)。

次節「理性の先導者」で、モハレスはバルドの著作活動の評価をおこなう。モハレスによれば、バルドは1884年の最初の本の刊行から1925年に亡くなるまで、言語・歴史・医学・社会問題等に関する16冊の本やパンフレットを出版した<sup>8)</sup>。モハレスはこの著作群を、①アメリカ植民地期以前の人文科学研究、②「アメリカが企画した」プロジェクト、そして③社会問題に関する論考の三つの時期に分けてその内容を検討する。その上で、モハレスは、執筆時期によってバルドの問題関心が変化したものの、彼の著作は、近代世界のなかで常に変化するフィリピンを理解するための合理的理性を養うことへの真摯な熱望によって突き動かされていたとみる (Ibid.: 161)。

まずモハレスは、1880年代から1890年代におけるバルドの医学、言語学、民俗学・地誌学関係の著作を分析し、アメリカ植民地期以前の人文科学研究の時代に、バルドが西欧の人文科学の枠組みを適用しながらフィリピン社会を理解するという知的世界を構築していたことに着目する。そして、バルドは権力の縁辺的位置に身を置き、西欧／非西欧のはざまを揺れ動きながら、フィリピンという地域の独自性を模索したものの、その社会的進歩は西欧を模範としているという確信があり、こうした思考様式がバルドをプロパガンダ運動から遠ざけることになったとする (Ibid.: 162-176)。

アメリカ植民地期になると、バルドはアメリカによるフィリピン統治の協力者としての役割を担っていく。1900年には翌年のフィリピン国立図書館の設立の基礎となるアメリカ移動図書館の理事に任命され、1901年にはアメリカ政府からフィリピンに関する出版物のカタログ作成の委託を受け、さらに1903年にはフィリピン諸島の地理的名称のつづり字を標準化する委員会の委員を務めた。また、バル

ドは『1903年フィリピン・センサス』用にフィリピン史を執筆し、スペイン植民地期の歴史の限界について触れ、フィリピン初の「国史」の構築をめざした。彼はアメリカ人に対してフィリピン人の願望を伝える一方、フィリピン人のためにアメリカが意図した政策を明らかにした。そして1909年に政界を退いたあともパルドは教育や社会問題にも関心を向け、執筆活動を続けたのである (Ibid.: 176-200)。

こうしたパルドをモハレスは次節「国家をつくる」でつぎのように評価する。長い間、忘れ去られていたのは、パルドの学者としての貢献である。彼はおそらく誰よりも先にフィリピン社会が抱える問題に対して社会科学的手法で理解しようとした人物である。医学や言語学の分野で正規の教育を受け、理論的な学識を身に着けたパルドとは、学知のさまざまな境界を横断し、学知の世界を自らの領域として獲得した啓蒙的知識人であった。パルドはサント・トマス大学やフィリピン革命政府が設立したフィリピン学芸大学の医学部で教鞭をとり、国立フィリピン大学では理事の任についたほか、東洋言語学科長を務め、フィリピンにおける学知の形成に貢献した。この意味で、教育の分野でパルドは、リサール、パテルノ、あるいは次章で扱うイサベロ・デ・ロス・レイエスよりも重要な役割を担ったとみることもできる、と (Ibid.: 229-230)。

## 5. 『国家の頭脳たち』を読む (3) : イサベロ・デ・ロス・レイエス

イサベロ・デ・ロス・レイエス (1864-1938) についての章は、本書のなかでも最も力が入った章である。イサベロ・デ・ロス・レイエスはベドロ・パテルノやT・H・パルド・デ・タバラのようなマニラの超富裕層出身の有産知識階層ではなく、北部ルソンの地方エリート層出身であり、1880年代後半のフィリピン国内における政治改革運動を担った人物である。したがって、イサベロ・デ・ロス・レイエスを本書で取り上げることは、本稿第1節で議論したように、従来のプロパガンダ運動をめぐる議論がスペインでの活動にのみ傾斜していたという欠陥を補填する意味をもっている。そして、それは、プロパガンダ運動からフィリピン革命への展開をフィリピン国内の社会経済構造の変化を背景とした一貫した政治運動として捉えることを可能にすることにもつながることになる。モハレスは、本章の最初の節「野生の修道士」の冒頭で、イサベロ・デ・ロス・レイエスの来歴を次のように紹介する。

彼はこの国のなかでも最も型破りの知識人であった。エネルギーに満ち溢れた変人として、イサベロ・デ・ロス・レイエスは、スペインとアメリカの支配に対する抵抗運動をおこない、マニラの中央刑務所とバルセロナの悪名高きモンジュイック城に投獄された。無法主義者や社会主義者と付き合い、反政府的な教会を設立したうえ、フィリピンにおける労働運動の基礎を築いた。並はずれた書き手として、彼は歴史、民間伝承、言語、政治、宗教などさまざまなテーマに関する論説で健筆をふるった。

彼は私生活においても華々しい展開をみせた。彼は3度結婚し、相手の3人の女性は、タガログ人、スペイン人、そして華人系メスティーソであり、合計27人の子どもをもうけた。彼はつぎのように語ったと伝えられている。「私には十分なほどの混沌があるが、それは神がもうひとつの世界を創造するためである」 (Ibid.: 255)、と。

以下、モハレスの記述にしたがってイサベロ・デ・ロス・レイエスの来歴を追ってみよう<sup>9)</sup>。彼は1864年7月7日にイロコス地方の中心地ビガンのエリート層の家に生まれた。母親はコメディヤと呼ばれる民衆劇作家であり詩人として著名な女性である。他方、父親はビガン生まれのスペイン系メスティーソの裕福な商人であり、1810-13年にスペイン議会で最初のフィリピン代表を務めた人物と遠縁の関係にあった。しかし、両親の結婚生活はうまくいかず、イサベロは6歳ときに法律家である伯父のもとに引き取られ、ビガンの神学校にかよった。しかし、1880年、彼が16歳のときに両親が離婚すると、イサベロは伯父の許可を受けずにマニラに向かい、サンファン・デ・レトラン校に入学、1883年に同校を卒業した。その後、自身で収入を得るため、新聞や雑誌などのコラムニストになり、1884年

に結婚した。このときイサベロはサント・トマス大学で法律を学んでいて、1887年に卒業したものの、25歳の年齢に達していなかったため、公証人として仕事をすることはなかった (Ibid.: 255-258)。

マニラでは、ときあたかも改革運動が高まっていたが、イサベロが1888年のマニラの抗議デモに参加したという記録はない。そしてマニラではフィリピン政庁による弾圧で政治活動が抑圧されたが、イサベロはこうした時期にむしろ活発な文筆活動を展開していく。1889年6月に、彼は大胆にもスペイン語とイロカノ語の隔週出版の新聞紙『エル・イロカノ』を創刊した。フィリピンの現地語の最初の新聞として『タガログ毎日』がその7年前に刊行されていたが、この新聞はわずか5カ月で廃刊となった。他方、『エル・イロカノ』は1896年まで続いた。イサベロはヨーロッパから印刷機を輸入し、マニラの商業地区ピノンドで印刷業を営んだ。イサベロとは、モハレスにとって、「インディオ indio」(現地住民)と「プロビンシアーノ probiniano」(地方人)としての双方の資質を生かしながら、中心都市マニラで商業、分筆業、そして政治の3分野を統合した人物であり、その意味で、啓蒙化されたインディオであった。しかし、この時期にイサベロがスペインのプロパガンダ運動と直接のかかわりをもった形跡はない (Ibid.: 258-263)。

ところが、1896年8月にマニラで秘密結社カティプーナによる武装蜂起が起きると、イサベロも同結社とのつながりを疑われ、1897年2月に逮捕されてピリビッド刑務所に収監され、その直後に最初の妻が死亡した。その後、同年6月にスペイン行きの船に乗せられ、8月にバルセロナのモンジュイック城に投獄された。7カ月間の投獄後、解放されたイサベロはスペインにとどまり、無法主義者や社会主義者と交流し、2度目の結婚をする。そうする間に米西戦争の勃発がフィリピンにさらなる政治変動をもたらし、イサベロはマドリッドに在住しながら、フィリピン人による反アメリカ・キャンペーンに関与することになり、多くの論説を発表していく。しかし、1901年4月にアギナルド将軍が正式にアメリカ軍に対して降伏宣言をすると、アメリカ政府から身分の保証をとりつけて、同年10月にフィリピンに帰国する (Ibid.: 263-274)。

帰国後、イサベロはマニラで革命運動をおこなっていた仲間たちと政党結成にからむ活発な政治活動をおこなっていく。さらに1902年2月にはフィリピンで最初の労働組合、「民主労働組合」(UOD)を結成、イサベロはその初代委員長に就任し、アメリカ統治下においてフィリピン人独自の政治活動を模索する。イサベロの独立への思考は政治の分野にとどまることなく、宗教の世界にも及び、1902年8月には、グレゴリオ・アグリパイを中心としてフィリピン独立教会を設立した。その後1905年からイサベロはスペイン人の妻の待つスペインで過ごす。1909年に妻とともにマニラに戻ったものの、翌年に妻が死亡し、1912年にマニラのピノンド地区出身の女性と再婚する。そして、このころになるとフィリピン議会が発足するなかで、人々のフィリピン独立教会への関心も薄れていく。イサベロは1922年に北部ルソン地方選出の上院議員となるが、1929年に健康状態の悪化を理由に政界から引退し、1938年10月10日にこの世を去るのである (Ibid.: 274-288)。

モハレスは以上のようにデ・ロス・レイエスの来歴を追跡したあと、次節の「国内の学知を展開する」の冒頭において、彼の著作活動の特色について次のように言及する。

イサベロ・デ・ロス・レイエスの経歴は、プロパガンダ運動がディアスポラの現象と同様に国内での現象でもあったことを気付かせてくれる。スペインやその他ヨーロッパ諸国におけるフィリピン人の仕事に関心が引き寄せられてきたなかで、この運動は植民地の現実のみならず、植民地の政治的かつ知的制約のなかで活動したフィリピン人たちによって形づくられたものである。

デ・ロス・レイエスがスペインへの国外追放となったことは彼にとって重要な経験であったが、彼はリサル、パテルノ、あるいはパルド以上に「国内で成長した」知識人だった。彼は地方出身者で自らの出自たるエスニシティについて誇りをもち、国内で執筆活動をおこない、彼自身の威光の重要な側面として「国内の学知」を展開した。彼は、パテルノやパルド以上に、「啓蒙主義」は国内で生み出されたものであって、単に移入された現象ではなかったことを示している (Ibid.: 289)。

モハレスは、デ・ロス・レイエスについても、パテルノやパルドと同様に巻末に著作リストを掲げている (Ibid.: 545-551)<sup>10)</sup>。ただし、この著作リストは1887年からの刊行物であり、それ以前に書かれたエッセイなどは含まれていない。しかし、モハレスによれば、イサベロは早くも1881年にマニラの新聞紙『エル・コメルシオ』に小論を寄せ、スペイン統治下において外敵からマニラを守るために果たしたイロカノ人の役割を積極的に評価している。その後の著作でもイサベロはイロコス地方出身者として、イロコス地方の重要性を訴えるが、その視点は狭隘な地方主義ではなく、むしろ現地住民としての自己主張だった。1889年からはとくに歴史への関心を進め、同年に『フィリピン民俗学』(2巻)を、翌年には『イロコス地方史』(2巻)をマニラで出版している (Ibid.: 289-304)。

モハレスは、イサベロの著作群のなかで『フィリピン民俗学』を最も高く評価する。同書は、未刊行の史料・手紙・報告書・詩・定期刊行物の記事などを収録したものであり、著作物というよりは資料集に近い。しかし、イサベロは、民俗学を「新しい科学」として意識しており、1846年のイギリスの新聞で「民俗学」(folk-lore)という用語が最初に使われ、1878年にロンドンにおいて世界ではじめて民俗学会が設立されたことに注目している。こうした学問の新しい展開を意識しながら、イサベロは『フィリピン民俗学』ではフィリピンの伝説・民話・迷信などを収集し、先史時代の人々の文化を調査比較することをめざした (Ibid.: 304-312)。

かくしてモハレスは、本章最後の節「イサベロを生み出す」でつぎのようにまとめる。イサベロは、19世紀の「フィリピンにおける啓蒙主義」が生み出したものである。ただし、彼の著作を西欧の学問の単なる模倣として退けることはできない。植民地という狭い領域のなかで活動し、リサール、パテルノ、そしてパルドのような教育の機会を得ることがなかった人々にとって、イサベロが披露した学術的知識は大きな意味をもっていた。イサベロがリサールらと異なるのは、彼がリサールらよりも国内により強い基盤をもっていたことであり、将来に向かって展望するにあたり内側から思索したことにある。とはいえ、イサベロは農村で生まれたエリートではなかった。彼は西欧流の教育を受けつつ、自身の経験からイロコス地方やフィリピンの文化を発見しようとしたのである (Ibid.: 338-364)。

## 6. 『国家の頭脳たち』を読む(4): フィリピンの啓蒙主義

本書の最終章「フィリピンの啓蒙主義」は、これまでの章と同様に三つの節から構成されている。「絡み合う系譜」、「エリート層の台頭」、「私たち自身について記述する」と題された三つの節をとおして、スペイン植民地統治をへてフィリピンにおける学知がどのように形成されていったのかについて、従来の議論を補完し、ときにそれに対して批判的見解を展開しながら、その歴史の再構成を試みている。

第1節「絡み合う系譜」では、16世紀半ばから19世紀半ばまでの約3世紀に及ぶスペイン統治下において、学知の形成の担い手が教会組織だったことが明らかにされている。フィリピンでは17世紀初頭までに五つのカトリック修道会、すなわち、アウグスチノ会(1565年)、フランシスコ会(1578年)、イエズス会(1581年)、ドミニコ会(1587年)、そしてリコレクト会(1606年)が布教を開始した。フィリピンで布教をおこなうにあたって、スペイン人神父が最初に必要としたことは、現地の言語を学ぶことであった。そのため現地語の文法書と辞書が必要となり、1776年までにタガログ語だけで20種類以上の文法書が作成された (Ibid.: 383-384)。

またスペイン人神父たちは、フィリピンの地理や医薬などの自然環境や現地住民の慣習にも関心を向けた。1589年のプラセンシアによる『タガログ人の慣習』を皮切りとして、17~18世紀にはスペイン人神父たちによってフィリピンの地誌・歴史に関する書物が編まれていった。さらに18~19世紀初頭になると、フィリピンに政庁の官僚として赴任したスペイン人やその他ヨーロッパからの旅行者や研究者たちがフィリピンの自然・地誌・言語などについて記述を残すようになった。しかし、ヨーロッパの言語で書かれた著作群は未刊行のものが多く、出版されても海外で出版され、部数もわずかであった。そのうえ、現地住民はあくまで考察の対象であって、彼らに知識を提供するためではなく、ヨーロッパにフィリピンを紹介することを目的とするものだった (Ibid.: 384-388)。

他方、スペイン人神父たちが現地の地方有力者層出身の若者を通訳者、書写者、伝教者、秘書、声楽隊員、祭壇奉仕者などの助手として雇ったことによって、現地住民の間で知識人層が台頭した。モハレスは、現地のエリート層の典型例として、トマス・ピンピンとペドロ・ブカネグの例を挙げている。バタアン州出身のピンピンは1610年にタガログ語で、現地住民が書いた最初の本とされる『タガログ人がスペイン語を学ぶ本』を書いた。他方、イロコス地方出身のブカネグは、アウグスチノ会神父の助手としてキリスト教教義とイロカノ語についての2冊の本を1621年と1627年にまとめた。スペイン人たちはスペイン語と現地語の双方を理解する現地のエリート層をラディーノ (ladinos) と呼んだが、ピンピンとブカネグはその第一世代であった。さらに1704年になると、タガログ語の最初の詩人ガスパール・アキノ・ペレンの984節からなる「わが主イエス・キリストの神聖なる受難詩」が印刷された。彼はバタンガス州出身で、マニラでイエズス会の印刷所を経営していた。こうして、カトリックの布教と現地住民のなかのエリート層の台頭には密接な関係があった (Ibid.: 395-403)。

さらに18世紀半ばころになると、現地住民がカトリック神父として地域の布教に携わるようになった。そうしたなかで19世紀前半までに多重的かつハイブリッド的なエリート層が現地住民の間で登場していった。モハレスは、こうしたエリート層を三つに分類し、一般庶民層出身者としてフランシスコ・バルタサル (1788-1862) を、カトリック神父としてマリアノ・ピラピル (1759-1818) とアポリナリオ・デ・ラ・クルス (1815-41) を、そしてクレオーレと呼ばれるマニラ生まれのスペイン人としてルイス・ロドリゲス・バレラ (1768-1826) とドミンゴ・ロハス (1782-1843) を挙げている (Ibid.: 383-388)。

通称バラグタスとして知られるバルタサルは、ブラカン州の鍛冶屋の息子として生まれた。11歳のときにマニラに移り、その後サンホセ学院で中等教育を受けながら、プラピルなどから多くを学んだ。そして1838年にフィリピン文学の傑作のひとつとされる『アルバニア王国のフロランテとラウラ』を発表した。ピラピルは、ブラカン州の裕福な家庭に生まれ、カトリック神父となった。彼はサント・トマス大学で神学を学び、現地住民としてはじめて博士号を取得し、サンホセ学校で哲学の教授を務めた。しかし、現地住民であることがカトリック教会での昇進を妨げていることに異議を唱えた。他方、バレラはマニラ生まれのスペイン人で、フランスで教育を受けたのち、マニラ市役所で働いた。彼は植民地における教育の充実を訴え、カトリック神父となった現地住民の権利を擁護した。ロハスはフィリピンで最も富裕なビジネスマンの一人であったが、スペインによるフィリピンの統治体制に不満をもって活動した人物であった (Ibid.: 407-412)。

1841年の反乱で知られるデ・ラ・クルス、通称エルmano・プーレは、タヤバス州の比較的豊かな農民の息子であった。彼は1830年にマニラに行き、修道会に入ることをめざしたものの、当時、現地住民には許可されていなかったため、みずから聖ヨセフ兄弟会を組織し、数千人の信者ととともに反乱を起こした。モハレスはここで、エルmano・プーレの反乱は、フィリピンにおける宗教組織による最初の反乱ではなく、植民地権力の制度と形態に対して直接的に対峙したはじめての反乱であったとする。そしてレイナルド・イレートがその著書『キリスト受難詩と革命』で指摘したのとは異なり、デ・ラ・クルスはババイランと呼ばれる救世主として先植民地期の宗教への回帰を説いたのではなく、西欧の修道会への加盟を望んでいたのであり、そのために西欧の中世的組織である兄弟会をその手段として利用し、それに従った儀式と言語表現を採用したという。この意味で、彼が体現していたのは土着化したキリスト教、すなわち、キリスト教化されたアニミズムであった (Ibid.: 415-416)。

第2節「エリート層の台頭」は19世紀後半のスペイン植民地期末期の激動の時代を扱っている。ここでまずモハレスが目にするのは、この時期に教育機関が増加したことにより、学知形成の場が教会組織から教育機関に移ったことである。例えば、1861~98年にサント・トマス大学で勉強した学生数は4万人ほどに及び、そのほとんどがフィリピン人であり、法学、医学、哲学などを学んだ。こうした高等教育を受けた人びとは低地に住むキリスト教徒人口の1パーセントにも満たなかったが、この時期のフィリピン社会の経済変化を背景として、富裕なスペイン系や華人系のメスティーソのなかにはスペインなどヨーロッパ諸国に留学するものも出現した。さらにフィリピン社会の経済変化を背景として、行政

組織の改革が徐々に進み、印刷技術が発達した。そしてマニラではフリーメーソンと呼ばれる友愛結社や労働者の職業組合などが組織され、彼らの間でさまざまな情報が交換されるようになったという (Ibid.: 419-436)。

こうしたなかでフィリピン国内におけるエリート層が形成されたが、その契機は広く知られるように、1872年のカピテ暴動との関係で3人のフィリピン人神父が処刑されたゴンブルサ事件であり、1880年代における改革運動へとつながっていった。モハレスによれば、「1880年代の10年間ほどフィリピンの精神史において生産的な時代はなかった」(Ibid.: 451)。この時期にリサールの『ノリ・メ・タンヘレ (我に触れるな)』(1887年)と『エル・フィリプステリスモ (反逆)』(1891年)が刊行されたほか、本書で扱ったパテルノ、パルド、デ・ロス・レイエスなどが健筆をふるった。また、マリアノ・ポンセやデル・ピラールなどスペイン在住のフィリピン人が1889年にスペイン語新聞『ラ・ソリダリダード』を発刊し、1888年にマニラで結成されたプロパガンダ委員会とも連動して改革運動を進めた。しかし、スペインでの改革運動は1892年にリサールとデル・ピラールの間の対立などでその意義を失い、リサールは帰国後に逮捕されてミンダナオ島に幽閉された (Ibid.: 441-464)。

そして改革の嵐はさらに革命運動へと引き継がれていった。リサールが逮捕された晩に、アンドレス・ボニファシオ (1863-97)らのマニラの都市労働者たちによって革命結社カティプーナが組織された。1896年には機関紙「カラヤン (自由)」が発行され、1年を経たずしてその会員は2万人を超えた。その多くはマニラの会社で働く事務員や職人、学生、商人たちで、それまでの改革主義者の組織と異なり、直接的に一般住民に訴えた。ボニファシオの片腕となったのはエミリオ・ハシント (1875-99)であった。彼は貧しい簿記係の息子であったが、サント・トマス大学で学んだこともあった。彼らはリサールやパテルノのような学歴はなかったが、決して「無学の輩」ではなかった。モハレスがここで強調する点は、彼らはカトリック教義などをとおして革命をめざしたが、それはスペインの植民地支配のもとでカトリック神父やエリートたちの活動によってフィリピン社会に定着していったものであり、先植民地期の土着的伝統をそのまま反映してはいなかった。その意味で、彼らが用いた道徳的教義には、国家や共和国主義などについての近代的言説が巧みに組み込まれていたという (Ibid.: 464-466)。

第3節「私たち自身について記述する」では、20世紀前半にアメリカ統治が進むなかで、1880年代のプロパガンダ運動時代にその中心軸が形成されたフィリピンの学知の継承と断絶、そして再生への道のりが追跡されている。こうした視点から、モハレスは、長い間忘却された2人の文化人、フェリペ・カルデロン (1868-1908)とクレメンテ・J・スルエタ (1875-1904)を取り上げる。

カルデロンは、マニラの裕福な家庭に生まれ、1893年にサント・トマス大学で法学を修めたのち、海外渡航をとおして植民地の行政組織について見聞を深め、革命政府の憲法の草案づくりにも関与した。1899年にはマニラで弁護士協会を組織し、さらに法律学校を設立し、自ら教鞭を執った。同校では法律学だけでなく、社会学や政治経済学そして統計学も教えられたという。そうしたなかで、カルデロンは1904年に国語研究所の前身となる「タガログ語話者協会」(Samahan ng mga Mananagalog)を、翌年にはフィリピンで最初の歴史協会として「フィリピン歴史協会」(Asociacion Historica de Filipinas)を組織し、その傍らで1905年に『フィリピン市民法のABC』、そして1907年に『革命についての私の記憶』を発表した (Ibid.: 475-476)<sup>11)</sup>。

他方、スルエタは、サント・トマス大学で法律を学びながら、政治や詩などについて議論する青年であった。1896年には革命結社カティプーナのマニラのパコ地区の書記を務め、またビアック・ナ・バト協定の交渉時にはパテルノの個人秘書として働いた。1899年後半からはリセオ・マニラで歴史を教え始め、1903年からはフィリピン統治委員会の依頼を受けてフィリピン諸島に関する多くの書物を収集したが、1904年に若干29歳の若さで他界した。モハレスは、スルエタが1902年にリセオ・デ・マニラでおこなった講義「フィリピン諸島の歴史における土着的要素」(1905年公刊)に注目する。スルエタはそのなかで、土着的要素は表面には出てはいないが、フィリピン社会の主要な要素であり、先史時代だけではなく、スペイン統治時代においてもフィリピン社会の基本的な基礎を成しており、先植民地時代における諸外国との交流を通してダイナミックに変化する融合的力をもっていたと論じたから

である。モハレスは、ここで歴史家グレゴリオ・サイデの言葉を引用して、スルエタは「スペイン人の歴史編纂者たちによる偏向された観点からではなく、フィリピン人自身の視点から、フィリピンの歴史を理解する必要を説いた最初のフィリピン人歴史家たち」のひとりであったとする (Ibid.: 482-484)<sup>12)</sup>。

20世紀初頭にはフィリピン人自身の視点からフィリピンの歴史を書くという萌芽的な試みがあったものの、モハレスは、そうした流れはアメリカ統治下の新たな教育制度の導入のなかで閉ざされてしまったという。そして、パテルノやパルドそしてデ・ロス・レイエスらの著作群も、彼らをエリートとして扱うことにより、彼らが公共で果たした役割やとくにデ・ロス・レイエスのフィリピン民俗学への貢献も顧みられなくなった。エリートと大衆を対立的に捉える歴史像は、19世紀のフィリピンで展開したダイナミックで特徴的な社会構成を捉えることはできない。今日、国民的精神は、歴史のなかに位置づけられた知とフィリピン人自身の視点によって形成されるものであるが、それは生成途上にある。パテルノやパルドそしてデ・ロス・レイエスが遺した著作群は、そのために大いなる教訓を与えていると、モハレスは結論づけるのである (Ibid.: 495-505)。

## むすび

本稿では、はじめにモハレスの略歴と業績を紹介し、ついでその主著『国家の頭脳たち』の意義を考察するために各章の内容を要約した。この結果、明らかになったことは、以下の2点である。

第1に、従来の研究では、1880年代に展開されたプロパガンダ運動はスペインに留学・滞在したフィリピン人有産知識階層によって担われてきた側面のみが強調されてきたが、本書においてパテルノ、パルド、そしてデ・ロス・レイエスの来歴と著作群を検討することによって、プロパガンダ運動の展開をより広い視野で位置づけることができるようになった。そして、そのことによって、1880年代のスペインやフィリピン国内の改革運動と1890年代以降の革命運動とのつながりが、より明確な構図として描かれるようになった。

第2に、従来の研究では、革命運動の担い手にエリート層と一般民衆があり、この二つの担い手の間に大きな断絶があったとされることが多かったが、エリート層のなかには一般民衆とほぼ同じ土俵で思考できる人びとがいた。モハレスの研究では、アポリナリオ・デ・ラ・クルスやアンドレス・ボニファシオらはこうした人びとであった。本稿第1節で紹介した「アンドレス・ボニファシオと階級問題」と題する講義で、モハレスは、リサール、パテルノ、パルドを「イラストラード」(有産知識階層)と呼ぶならば、こうした知識人たちを「イラストラディリョ *illustradillo*」(中間的知識階層)と呼ぶことを提唱している (Mojares 2017: 33-34)。

以上のことから、本書が従来のプロパガンダ運動史研究はもちろん、広くはフィリピン革命史に欠如した部分を大いに補完しつつ、新しい視座を提示している。とりわけフィリピン革命史研究においては、いわゆる英雄に焦点を当てることが多い。しかし、モハレスがこれまで十分に光を当てられず、むしろ無視さえされてきた知識人や文化人に注目したことは、彼自身がフィリピン国内で学位を取得し、マニラ首都圏ではなく、地方都市セブで活動を続けてきたゆえに、これまで歴史学のなかで残されてきた周辺の要素を丹念に拾いあげることができたように思われる。この意味からも、本書は、アゴンシリョの『大衆の反乱』やイレートの『キリスト受難詩と革命』と並ぶ、フィリピン革命史研究における名著と位置づけることができよう。

(ながの よしこ 客員研究員 神奈川大学名誉教授)

## 注

- 1) フィリピンの有産知識階層 (イラストラード *ilustrado*) がスペインで展開したプロパガンダ (啓蒙改革) 運動の古典的研究に Schumacher (1973) がある。近年の研究潮流のなかでのエリート層についての主要な

- 研究書としては、本小論で扱う Mojares (2006) のほか、Rafael (2005)、Blanco (2009)、Thomas (2012)、Hau (2017) を挙げることができる。
- 2) 1966～2015 年のモハレスの著作リストとして、Sabanpan-Yu ed. (2015: 265-289) を参照。なお、近著に Mojares (2023) がある。
  - 3) たとえば、Mojares (1986) などを参照。
  - 4) なお、ペドロ・パテルノの生まれた年は、1857 年と 1858 年の 2 説ある。本稿では、モハレスに従って彼の生年を 1857 年としている。
  - 5) 同館は、1908 年にフィリピン公共図書館（現在の国立図書館）となった (Mojares 2006: 17)。
  - 6) 小説『ニナイ』について詳しくは、Matibag (2010) を参照。
  - 7) T・H・バルド・デ・タバラの伝記としては、Manuel (1955: 317-347) と Zaide (1970: 378-382) も参照。
  - 8) バルドの著作物リストは、本書の巻末をみよ (Mojares 2006: 535-545)。
  - 9) イサベロ・デ・ロス・レイエスの伝記としては、Zaide (1970: 457-463) も参照。
  - 10) イサベロ・デ・ロス・レイエス作品のうち、近年の英訳として De los Reyes (2014) がある。
  - 11) モハレスは、カルデロンが 1905 年の国際マニラ・クラブでの講演「フィリピン史のために」で、フィリピン史は英雄伝や大事件から、地域社会の「有機的」生活、つまり一般の人々の日常生活その総和について関心を変化させることを訴えた点に注目する (Mojares 2006: 484-485; Mojares 2017: 21)。カルデオンはボニファシオについて次のように語ったという。「もしアンドレス・ボニファシオが、わが国民がほかの手段では獲得できないようなもっと大きな自由のためにすでに準備し、それを渴望していたことに気づいていなかったとしたら、彼は実際、どのようにしてわがカティブーンを組織し、それを動かすことができたのだろうか」、と (Ibid.: 21)。
  - 12) スルエタについては、Manuel (1970: 458-462) をも参照。

## 参考文献

- Agoncillo, Teodoro A. (1956/1996) *The Revolt of the Masses: The Story of Bonifacio and the Katipunan*, Quezon City: University of the Philippine Press.
- Blanco, John D. (2009) *Frontier Constitutions: Christianity and Colonial Empire in the Nineteenth-Century Philippines*, Berkeley: University of California Press.
- De los Reyes (2014) *Isabelo de los Reyes's Ang Diablo sa Filipinas ayon sa nasasabi sa mga casulatan luma sa Kastila*, trans. By Benedict Anderson, Carlos Sardiña Galache and Ramon Guillermo, Mandaluyong City: Anvil Publishing.
- “Dr. Resil Mojares” (2011) Cebuano Studies Center, <https://www.cebuanostudiescenter.com/dr-resil-mojares/> (最終アクセス 2023 年 3 月 1 日).
- Hau, S. Caroline (2017) *Elites and Ilustrados in Philippine Culture*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Hau, S. Caroline, Patricio N. Abinales, Filomeno V. Aguilar Jr. Lisandro E. Claudio, Michael Cullinane, and Michael D. Pante (2019) “Interview: Resil B. Mojares: Adventures and Itineraries in Philippine Cultural History,” *Philippine Studies: Historical & Ethnographic Viewpoints*, vol. 67, no. 3-4.
- Ileto, Reynaldo C. (1979/1989) *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press (レイナルド・C・イレート著、清水展・永野善子監修、川田牧人・宮脇聡史・高野邦夫訳『キリスト受難詩と革命：1840～1910年のフィリピン民衆運動』法政大学出版局、2005年).
- Manuel, E. Arsenio (1955) *Dictionary of Philippine Biography Volume One*, Quezon City: Filipiniana Publications.
- Manuel, E. Arsenio (1970) *Dictionary of Philippine Biography Volume Two*, Quezon City: Filipiniana Publications.
- Matibag, Eugenio (2010) “The Spirit of *Ninay*: Pedro Paterno and the First Philippine Novel,” *Humanities Diliman: A Philippine Journal of Humanities*, vol. 7, no. 2.
- Mojares, Resil B. (1983) *Origin and Rise of the Filipino Novel: A Generic Study of the Novel until 1940*, Quezon City: University of the Philippines Press.
- Mojares, Resil B. (1986) *The Man Who Would Be President: Sergio Osmeña and Philippine Politics*, Cebu City: Maria Cacao Publishers.
- Mojares, Resil B. (1999) *The War against the Americans: Resistance and Collaboration in Cebu, 1899-1906*, Quezon

- City: Ateneo de Manila University Press.
- Mojares, Resil B. (2002) *Waiting for Mariang Makiling: Essays on Philippine Cultural History*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Mojares, Resil B. (2006) *Brains of the Nation: Pedro Paterno, T.H. Pardo de Tavera, Isabelo de los Reyes, and the Production of Modern Knowledge*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Mojares, Resil B. (2013) *Isabelo's Archives*, Mandaluyong City: Anvil Publishing.
- Mojares, Resil B. (2017) *Interrogations in Philippine Cultural History: The Ateneo de Manila Lectures*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Mojares, Resil B. (2023) *Enigmatic Objects: Notes towards a History of the Museum in the Philippines*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- "Mojares, Resil B." (2020) IN *Encyclopedia of Philippine Art (EPA) Digital Edition*, Cultural Center of the Philippines (CCP), epa.culturalcenter.gov.ph (最終アクセス 2021 年 9 月 7 日).
- Ocampo, Ambeth (2005) "The First Filipino Novel," *The Philippine Daily Inquirer*, December 5, Global Nation | INQ7.net (archive.org) (最終アクセス 2023 年 3 月 8 日).
- Rafael, Vicente L. (2005) *The Promise of the Foreign: Nationalism and the Technics of Translation in the Spanish Philippines*, Durham and London: Duke University Press.
- Reyes, Portia L. (2006) "A 'Treasonous' History of Filipino Historiography: The Life and Times of Pedro Paterno, 1858–1911," *South East Asian Research*, vol. 14, no. 1. Sabanpan-Yu, Hope ed. (2015) *The Resil Mojares Reader*, Cebu City: University of San Carlos Press.
- Schumacher, John N. (1973) *The Propaganda Movement, 1880–1895: The Creators of a Filipino Consciousness, the Makers of the Revolution*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Thomas, Megan C. (2012) *Orientalists, Propagandists, and Ilustrados: Filipino Scholarship and the End of Spanish Colonialism*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Zaide, Gredorio F. (1970) *Great Filipinos in History: An Epic of Filipino Greatness in War and Peace*, Manila: Verde Book Store.
- 永野善子 (2005) 「解題」、イレート著、清水・永野監修、川田・宮脇・高野訳『キリスト受難詩と革命』法政大学出版局。
- 永野善子 (2013) 「抵抗の歴史としての反米ナショナリズム：レナト・コンスタンティーノを読む」、永野善子編著『植民地近代性の国際比較：アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』御茶の水書房。
- 永野善子 (2018) 「フィリピン革命史再訪：近年のフィリピンにおける研究潮流を背景として」、永野善子編著『帝国とナショナリズムの言説空間：国際比較と相互連携』御茶の水書房。
- 永野善子 (2020) 「グローバル化時代のフィリピン革命史研究：近年の欧米研究者たちの動向」『神奈川大学アジア・レビュー』第7号。
- 永野善子 (2021) 「フィリピン人歴史家によるフィリピン史への挑戦：アンバス・R・オカンポのフィリピン革命史論」『神奈川大学アジア・レビュー』第8号。
- 永野善子 (2022) 「テオドロ・A・アゴンシリョの『大衆の反乱』を読む：フィリピン革命史研究の原点として」『神奈川大学アジア・レビュー』第9号。